

第 25 回 富士山写真大賞

審査員 三宅 岳（写真家）

総評

一年はあっという間である。

昨年度の富士山写真大賞の総評で、僕は泰然と構える富士山の魅力を語っている。動乱の世を遥かに見下ろす、その揺らぎのなさを魅力ととらえたのだ。しかし、このたった一年の間を振り返るだけでも、本当に富士山は泰然としているのだろうか。そんなことも考えるようになった。

不動如山（＝動かざること山のごとし）と通称『風林火山』と呼ばれる幟旗に記したのは、甲州から全国に睨みをきかせた戦国武将武田信玄だという。ざっくりと言えば五百年ほど昔の話である。信玄公が日々仰いだであろう富士の高嶺は、戦国という大きく揺れる時代にあっても、動かざることに見えたはずだ。しかし、21 世紀も四半世紀となる今日、富士山でさえ泰然としてられない世の中を考えてしまうのだ。

* *

気候変動。以前よりその兆候は感じられていたものの、2024 年ほど実感を伴って気候の変化を感じた年は無かった。ゲリラ豪雨、線状降水帯。大地震、猛暑、酷暑。数十年に一度数百年に一度、という言葉が頻繁に流れてくる日常に、果たして地球はどこに向かっているのだろうか、と思わぬ日はなかった。

11 月 7 日に富士山の初冠雪を観測、というニュースは衝撃であった。甲府気象台開設以来、130 年もの間で最も遅い記録である。平均初冠雪が 10 月 2 日というから、それより一ヶ月以上も遅かった。日本全土を覆った酷暑という夏は、霊峰富士山であっても、大きな影響を与えてきたのだ。夏であっても、時に凍えるばかりの涼しさというのが、富士山頂の通例。しかし、早々に雪が溶けて黒々とした地肌のままの富士山は、すでに秋本番という時期になっても、そのままの姿でもぬっとそびえていたのである。

天然自然のその根幹である気象条件が、けっして良くはない方向に、ダイナミックに変化をしはじめている。

* *

変化といえば、2024 年は富士山登山スタイルにも大きな変化があった。

登山規制が厳しくなり、山梨県側では 5 合目からの入山時間に制限が設けられた。弾丸登山と揶揄される夜を徹しての登山がほぼできなくなった。2025 年度は静岡県側でも同様の規制がとられるとのこと。これぞ現代の富士登山ということになるだろうか。

漆黒の夜、どこからが山でどこからが空なのかすらわからぬ闇にむかって、登山者の灯す明かりが一本の筋となり天空に登ってゆく。本コンテストにあっても、そういった作品を幾度も目にしたものなのだ。一つ一つはか細い灯火であっても、それが連なり、一つの道筋が浮かび上がる。夜の富士山ならではという景でもあったが、もはやそういった写真も過去、一時の幻として語られる時代に移行したのかもしれない。

* *

写真がたぐり寄せてくる富士山の姿は、ともすれば時間軸とはかけ離れた、永遠の揺らぎ無い美への追求に徹することがある。泰然とはそういうもので、それはそれでよい。

しかし、写真も、あるいはかつての絵画も、ある時代ある瞬間の語り部という役割をどこかに背負う宿命をもっている。永劫不変の姿を撮影したつもりであっても、それは人の一生という、ごく限られた時間感覚での永劫であり、地球誕生以来の時間スケール、あるいは富士山が誕生したという10万年前から今日までという時間スケールからは、ほんの刹那のひとときにすぎない。

永劫と刹那。どうやって富士山をとらえていくのか。現在の富士山にレンズを向ける時、頭の片隅にそんな事を思い描いてもらうのも、なにかのヒントになるかもしれない。

* *

さて、それでは今回の富士山大賞について。まず参加者である。応募点数は1167点と再び4桁を回復。4割近くの増となった。また、応募人数も4割近く増加した。今回は台湾の方からも応募があった。しばらく続いた減少傾向に歯止めがかかったのはなんとも嬉しいところだ。また、ご当地富士の応募点数はそれほど伸びず、しかも作品としての力があると感じられるものが少なかった。

これからも、なお一層多くの方に富士山と向かい合ってもらいたい。誰も見たことのない富士山を、写してもらいたいと願うところだ。

では、個別の作品について講評していこう。

金賞「唐紅の富士」鈴木邦幸さん撮影

比類なき孤独に、静謐なる祝福。シンプルに、しかし堂々と富士山を捉える。

これだけ規模の大きなコンテストになると、どうしてもテクニックを競う作品、悪い言い方をすれば手練手管の作品が多くなる。そのなかで、ストレートに撮った穏やかな富士山が、心のなかにずっと染み入ってくる。

山というものの多くは、いくつもの頂きが背を比べ、峰は連なり、谷は幾重にも襷のごとしという姿である。山脈・山塊・山地。個性ある山々ではあっても、やはりどこかで繋がりがあがる。

しかし、富士山は違う。丈を比べるような高峰をいっさい従えぬ姿で、その端正なフォルムの一部始終をさらけ出している。比類なき孤独をじんわりと楽しんでいる姿がそこにある。単独峰という宿命を、見事な淡麗に昇華しているのだ。

富士山の裾野までしっかりと入れた作品。余す所なくシンメトリーに収まるその単純にして明快なフォルム。そこに、夜明け前の紅色、撮影者が唐紅と表現する染まった空が過ぎるほどに鮮やかだ。そして、これが実に効果的なのである。さらにそれを映す水面もまた穏やかである。すくっと立ち並ぶ葉を落とした木々の姿も、見事なまでに富士山のフォルムをひきたてている。暗さを基調にして、使われる色も限られる。それだけに、唐紅とタイトルする鮮やかさが生きてきている。

冒頭、動かざるも魅力と、けっしていつまでも動かざるではない、という予感めいたことを記したが、この安定した美しさからは、やはり動かざるという安堵がゆっくりと湧きあがり滲み込んできく。我々は、いつまでこの美を堪能できるのであろうか。できるなら永劫であってほしい。そんな夢を見させてくれる一枚が金賞を射止めた。

銀賞「恵」平川菜津美さん撮影

富士の彼方に日輪の煌めき。ダイヤモンド富士はコンテスト作品にも多く応募されている。逆光に浮かび上がるシルエットは力強く、それだけでも見ごたえのある絵にはなる。絵にはなるのだが、その多くはどこかに既視感ある作品ばかりとなる。

この作品が見せつけるのは、既視感を大きく超越した未知の富士山である。シンプルでシンメトリーな構図。けっして富士山を大きく扱った作品ではないが、全体的に暗めの構成で迫力がある。富士山に向かって真正面。天国への階段を思わせる唐突な流れは用水路だと聞いた。おそらく、富士山撮影ポイントとしては名の知られている場所ではなく、日常生活に寄り添うような撮影場所ではなかろうか。その、なんでもない場所からの撮影でも、この迫力ある『見たことのない』富士山を写せるのが写真の面白さだ。

両脇に生える、おそらくはギンギンなどのいわゆる雑草かと思うが、逆光を浴び、冴え冴えと光を放つようである。強めのコントラストで支配した画面は、全体に神々しさ、力強さをみなぎらしており、選者の心をぐらりと揺さぶったのだ。モーゼの十戒のように、大海原を切り開くような力強さは印象深く、もう一步で金賞という作品。銀にとどまったが、この斬新な視線は貴重である。

なお、もう一点、他の方が同一箇所から写した作品があった。この撮影地を選んだということを見る目があるということだが、残念ながらこの作品が秀逸すぎ選から漏れた。

銅賞「浮笠雲」堀内治美さん撮影

写真は引き算である。写真を学ぶ時に、まず最初におぼえる、いわば公式である。余計な装飾を削ぎ落とし削ぎ落とし。見えていなかった骨格を浮かび上がらせる。もちろん、足し算の写真もある。様々な要素を漬け込み混沌を表現する。それはそれでヨイ。しかし、一点で表現を迫られるコンテストという場にあっては、混沌とした作品一点、というのは少々勝負になりにくい。

というわけで、原点の引き算で、みごとに引き絞った作品である。笠雲や斜光線といった好条件を探ったうえでの撮影なので、そこは上手さが光るところである。ただ、余計なものをしっかり削ぎ落とした引き算の構図だということは見逃せない。さらに、その上手さを、少し柔らかな温黒調のモノトーンに落とし込むことで、上手に撮したと気が付かれない程度のオブラートでくるんでいる。これはなかなかの演出である。

モノトーンで表現する場合、得てして、コントラストの高い、白黒はっきりさせた絵を作りがちである。評者自身も、そういった写真を好む傾向がある。しかし、この堂々としながら柔らかい仕上がりには、まるでスポンジに吸い込まれてゆくような穏やかな吸引力を感じてしまうのだ。

引き算をしたうえで、わずかにスパイスを効かせた秀作。美しいものである。

それでは6点の優秀賞について。

優秀賞「富士の高嶺にサクラふりつつ」三井雅之さん撮影

富士の高嶺に、とくれば、雪は降りつつ、とツナガルはずだが。なんと降っているのはサクラエビ。そう、サクラエビの漁といえば、駿河湾のまさに田子の浦付近。年二回しか漁期がなく、ごく限られた地元漁師にのみ許された貴重な漁である。そのシーンをローアングルから見事に射止めたセ

ンスの良さ。さらには、タイトルのウイットまで含めて、これは楽しい一枚に仕上がった。

優秀賞「凍てつく夜」小山幹男さん撮影

夜の富士山。デジタルカメラになってから、どんどんと応募の増えたテーマである。機材が進歩して、見ることでできなかった富士山を見ることができるようになった。その中で、完全氷結ではないひび割れた夜の湖面に惹かれた。星との組み合わせも、良い。これが20年も前ならば、とふと考える。富士山麓の湖にて凍てつく夜となれば、それは全面結氷の湖面に星の空、であったはずだ。そして、20年後にこの写真を見たら、あの頃はまだ少しは凍る湖だったのだ、という感慨を聞くかもしれない。写真ははからずも時代の証言者となりえるのだ。

優秀賞「煌」菅沼英己さん撮影

写真の中に、どれだけ季節を取り込めるか。知らず知らずに季節を語りかけてくる一葉の写真には、まるで俳句のような深淵の味わいがある。さて、今年は長い夏に秋の空気が恋しくてたまらなくなる時があった。そんな、スッキリとした秋を見事に描いた作品である。手前右から富士山にかかるように伸びてきたすすきを大きく取り入れたことが、季節をしっかりと浮き彫りにしている。そして八方に光芒を放つ太陽をど真ん中に据えたことで、作品の安定感と力強さが増している。もちろん、その眩さも効果的だ。

優秀賞「慄然と」千村信さん撮影

一瞬のシャッターチャンスに違いない。暮れ時。切れた雲間に突如現れた富士の頂。淡く残照に染まるその姿を、望遠レンズを用いて大胆に引き寄せた思いきりの良さが、秀逸である。良きタイミングを逃さないこと、その瞬間でしか見せない姿をきちんと収めているのだから、見事である。なお、タイトルは慄然とつけられているが、忽然や超然でも良かったかも知れない。

優秀賞「バトンタッチ」石上剛也さん撮影

夜から朝にかけて。空に引かれるのは北極星を仮の中心とした圧倒数の円弧。肉眼ではとらえられない暗い星の軌跡までを何回にもわけてすくい上げてゆく。富士山という地上の一山こそが動かざる主人公となり、天を構成する諸々は休むことなく動いてゆく。地動説とも天動説とも異なる、富士山を中心にした世界構築を夢見るような一葉。動くこと動かないことの錯覚を折り込んだような作品だ。なお、比較明合成を行っての撮影である。機種にもよるがカメラ内機能として搭載される、写真表現の一つと考えている。

優秀賞「清晨榛名」瀧しま修じさん撮影

郷土富士の一つ、榛名富士の作品である。日の出というタイミングをしっかりと写し止めている。日の出燦めく位置も山のフォルムを崩さない微妙な位置に設定しており、作者の繊細な心遣いがうかがえる。また前景となる枝ぶり豊かな木々の配置も的確であり、しっかりとした奥行きのある作品に仕上がっている。

郷土富士の作品。それなりの数は送られてくるのだが、多くは、カタログ的な紹介写真の枠をこ

えてはいない。そういった中でしっかりとした作品として印象深い一枚

以上が優秀賞までの評である。これに続く入選作は、いずれもが、あと一步で優秀賞に入れ替わる作品ばかりであった。選ばれなかった理由の一つには、優れた写真であっても、似たような写真が複数枚応募される場合がある、ということも憶えてもらいたい。これは、昨年度も書いているとおりだ。

今年の応募作で気がついたのは、富士山に登っての写真、山頂であれ山腹であれ、あるいは樹海の中からの作品でも良い。富士山そのものに立たなければ見ることができない富士山がいろいろあるはずだが、そういった写真が少なかった。また、引退が予定されるドクターイエローとの組み合わせとなる写真が数点応募されていた。写真は時代の写し鏡でもある。こういった時事的な要素との組み合わせ。次回応募でも楽しみである。

最後になるが、これからも油断することなく富士山と対峙し、心を込めてシャッターを切っていただきたい。選者相変わらず願うところである。